

## 助産師及び助産専攻大学院生を対象としたDOHaD に関する認識についての調査

著者	遠藤 綾, 佐藤 香苗, 武藏 学, 小山田 正人
雑誌名	DOHaD研究
巻	6
号	1
ページ	92-92
発行年	2017
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/3302">http://hdl.handle.net/10271/3302</a>

## 助産師及び助産専攻大学院生を対象とした DOHaD に関する 認識についての調査

遠藤 綾<sup>1)2)</sup>、佐藤 香苗<sup>2)</sup>、武藏 学<sup>2)</sup>、小山田正人<sup>3)</sup>

社会医療法人母恋日鋼記念病院栄養課<sup>1)</sup>、天使大学看護栄養学研究科  
栄養管理学専攻<sup>2)</sup>、藤女子大学人間生活学研究科食物栄養学専攻<sup>3)</sup>

【目的】2500g以下の低出生体重児が1割近いこと、出生時平均体重が減少していること、20歳代女性のやせが多いことなどの日本の現状は、今後DOHaDに関連するNCDs(non-communicable diseases)が増加する危険性を示している。妊娠前から妊娠中そして幼小児期に適切な栄養状態を維持するため、管理栄養士、助産師、保健師などの役割は重要である。本研究は、今後のDOHaD普及活動の基礎資料として、助産師及び助産専攻大学院生のDOHaDに対する認識を明らかにすることを目的とした。

【方法】研究対象は、H助産師会に所属している助産師232名と、T大学助産研究科助産基礎分野(助産師養成課程のため、看護師資格保有者)の大学院生42名である。調査方法は、Gageら(Am J Clin Nutr 2011;94(suppl):2018S)による質問票を英語から日本語へと翻訳したものを用いた。質問項目は、基本属性と4つの大項目、23個の小項目より構成されている。データについては、1)「DOHaD理論の認識」を含む21項目について、5つの順序尺度、「とても強く影響する」「強く影響する」「やや影響する」「あまり影響しない」「全く影響しない」のうち、強い影響を表す上位2つとその他に分けて分析した。2)比較検討:項目間および大学院生と助産師間の回答の差などを比較する。

【結果】学生の年齢は22~44歳で42名全員から回答が得られ、助産師は29~92歳の50名から回答が得られた(回収率21.6%)。(1)「妊娠中の母親の食事が、大人になった時の健康に及ぼす影響はどの程度だと思いか」に対して、「とても強く影響する」/「強く影響する」と答えた者の割合は、学生及び助産師でそれぞれ55.8%、50.0%であった。(2)「1歳までの食事が大人になった時の健康にどの程度影響を及ぼすと思いか」については、同55.8%、62.0%であった。(3)「小児期」あるいは「成人期」の食事が、成人期の健康にどの程度影響を及ぼすと思いかに対して、「とても強く影響する」/「強く影響する」と答えた者の割合は、それぞれ学生で95.3%と93.0%、助産師で88.0%と90.0%であった。

【結論】これまで報告してきた管理栄養士課程の学生と同様、助産師および助産専攻大学院生においても、妊娠中の母親および乳児期の栄養・食事が大人になった時の健康に及ぼす影響についての認識は、不十分であることが判明した。